

渡良瀬——歴史的エコ・フィロソフィに向けて

河本英夫（文学部）

要旨：渡良瀬川は、足尾銅山公害の拡散にかかわる、縦線の主役である。この河川は公害の歴史的痕跡を含みながら、現在も多くの人の生活の一部を形作っている。環境は、多くの場合歴史的履歴を含む。そうした歴史的環境は、単なる過去の記念碑ではなく、また苦悩の思い出ではなく、現在なお消えていくというかたちで現在に含まれる。鉱毒の緩和地が、下流に作られた「渡良瀬遊水地」である。この遊水地は、現在では大雨や台風のさいの水害を緩和する巨大な湿地となっている。遊水地方式の水害対策は、現在では新たな選択肢をあたえているのである。

キーワード：渡良瀬遊水地、足尾銅山、歴史的環境、田中正造

抒情があり、しかも不透明な陰りのある環境がある。一面の光のなかにありながら、なお視界の不明な環境がある。ひとときの歴史的な事件だと思いながら、消えてはいけぬ痕跡の残る環境がある。子供たちが打ち上げられる花火にキャッキヤと飛び回る草地の脇に、ひっそりと埋もれた沈み損ねた墓地がある。のんびりと週日に午前中から老人が釣りをしている。この淀んだ水流の淀みに多くの戦いの痕跡がある。渡良瀬川の流域は、こうした情感に浸されている。

環境というとき、事柄を鮮明にするために、自然環境、文化的環境、歴史的環境を区別しておくことが肝要である。これは環境問題にかかわるさいの補助線のようなものである。人間が環境内に住み、環境を改変していく以上、純粋な自然環境は存在しない。どのような環境についてのデータを取ろうと、それを人間が行う限り、いくぶんかは人間化されている。

しかし火山の噴火の影響やエルニーニョの影響のように、人間の影響度が測定誤差以内に入ってしまうような事象は無数にある。地磁気の反転や中国大陸の水不足のようなものも、人間の営為程度ではどのようにもならない。それに対して、クジラの頭数維持やイルカの保護のような問題は、まったく異なる問題であり、文化的なまなざしがすでに内的に浸透している。クジラもイルカも、絶滅が危惧されるような種ではない。だが特定種の保護という主張のなかに、別建ての主張が組み込まれている。この種の問題は根が深く、広げていくと、文化的な環境維持という課題には、それぞれ大幅な落差と多様性があることがわかる。

たとえば海洋汚染というとき、住民の人体に影響が出なければ、汚染だと感じられない境界域と、海洋生物にとっての影響が出る範囲を境界域だとする場合には、途方もない隔りがある。海岸沿いの砂浜にプラスチックゴミが浜辺を覆いつくすほど堆積しても、少し汚れている程度であり、海洋汚染を感じ取ることのできない文化と、人間の生活圏そのものがすでに汚染されているという感じ取

りのある文化とのギャップを埋めることは容易ではない。

文化間の違いは、何を健全な環境だとするかに大きく効いてくる。たとえばプラスチック製のストローが鼻穴に刺さったようなカメをみて、どのような緊急性の度合いで事態を感じ取ることができるのかに直結してしまう。こうした環境への感度は、そのつど形成するように努めておかなければ、いつも気づいたときには手遅れになる可能性がある。環境は、問題を感じ取ったときには、すでに厄介で解決の難しい課題となっている。

これらと並んで歴史的な環境という局面がある。八丈島は、長らく島流しの流刑地であり、犯罪者が社会的に隔離される際の送り先である。そのことの負荷が残り続けた環境があり、人間の生活にとっては、足元に堆積した地層のようにしみ込んでいる環境である。時としてそれは文化遺産として観光地化されることもあり、またときとして歴史的イベントのランドマークのように注意書きの付された場所として維持されていることもある。

八丈島には、流刑の罪人が暮らした亜熱帯性の森林もあり、そこにも流人が炭を焼こうとした痕跡がいまなお残っている。現在これらは活用されていないが、それでも歴史的履歴として、環境の一部を形成している。また八丈島に流されたままそこで没した夥しい人たちの墓地もある。これらは現在の環境の足元の土壌の不透明な分厚さと言ってもよく、すでに観光地化された八丈島の影の部分に綾をあたえていると言ってもよい。その場に立つとどこかに違和感が残るが、それが何であるかが良く分からない。そしてそれは多くの無名の人たちが残した生の軌跡の痕跡なのである。どのような環境にも、無名の生の折り合わされた歴史的な履歴はある。この履歴を感じ取りながら、環境を感受していく場面が、「歴史的環境」となる。

歴史は一般に現在の根拠となるほどの強い関係はない。だが歴史は未来によって規定されるほど恣意的なものではない。東アジアの歴史観の基本は、歴史は現在の根拠であるという、どうにも日本から見て理解しにくい歴史への感度がある。そのため繰り返し「過去」が引き合いに出され、過去を論拠に現在が論じられる。それに対して、日本だけは唯一アジアの例外のように、現在は未来によって作られるのである。そうなる歴史の評価をめぐり、繰り返し議論がなされ、この論争は終わることがない。そもそも「歴史という経験」が異なっているからである。

どのような営みであれ、歴史的状況をもとに開始される。そのつどそれを再組織化しながら、未来は作られていく。歴史は、こうして自己組織化されたものになるが、再組織化のなかに歴史そのものはいつも痕跡として残り続ける。歴史は、そのつどリセットされるが、この再組織化のなかにすでに現在に組み込まれ、さらに再組織化され続けるものとして、環境内に感じ取られていく。そのため歴史は、現在とは独立に存在し、現在を規定する根拠でもなければ、未来から割り当てられ、現在に残るたんなる遺産のようなものではない。

1 渡良瀬川

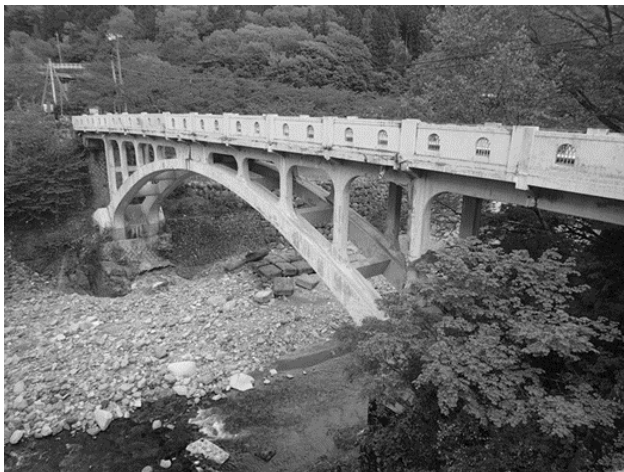
栃木県の桐生市で「わたらせ渓谷鉄道」に乗り換え、渡良瀬川沿いを進んでいく。私の住居である

坂戸市から見ると、川越から川越線で大宮に移動し、大宮から宇都宮線で小山に進み、そこから両毛線で桐生に着く。そこで「わたらせ渓谷鉄道」に乗り換えるのである。平地部では一面の田園であり、やがて渡良瀬川に沿って上流に上っていく。この風景はいまでは歌謡曲にも歌われ、「渡良瀬橋で見る夕日を、あなたはとも好きだったわ、きれいなところで育ったね、ここに住みたいと言った」等々の風景が続く。いくぶんか割り引いてもその程度の叙情は残っている。この歌は、「わたらせ」という音の響きにイメージを重ねて、かつてしばらくの間付き合った若い二人の思い出のラブソングである。

やや急峻な山道を列車は登っていく。「水沼」の駅では、駅舎に隣接するかたちで、水沼駅温泉センターが開設され、神戸(かんど)ではレストランが運営されており、この駅を超えたところで、お弁当の車内販売がやってきた。豚焼き弁当であり、「トロッコわたらせ渓谷号」とイニシャルの入った手拭いが添えられていた。朝5時起きをして、長時間電車を乗り継いでようやくこの「わたらせ渓谷鉄道」に乗車しているものだから、早目のお昼に、豚焼き弁当を食べることができ、いくぶんか気持ちも落ち着いてきた。

乗客の大半は、高齢者であり、私もその一人である。ほとんどの乗客は、「通洞」というかつての足尾銅山の入り口に相当する駅で降りた。終点間藤から二つ手前の駅である。5月にでかけたためか、川沿いに野生のツツジが点在している。川幅が狭く、河川敷は巨大な岩石に埋め尽くされている。ひとたび雨が降れば激流にしかならない地形である。

河川の上流は、細く深い川筋である。地理的にはちょうど日光の山を隔てた裏側に相当し、日光観光を兼ねた最後の中継地として、観光バス数台が停車していた。足尾町は平成の大合併を経て、現在では、日光市の一部となっている。足尾銅山開発以前に、小さな集落ができており、日光開山の祖、勝道上人が修行の途次に、この地を「渡良瀬」と命名したと伝えられている。それ以降、延暦7年(788年)に、伝教大師が創建した「宝増寺」ができています。渡良瀬上流は当初は修行の地であり、急流を渡る瀬が、「渡良瀬」の原義なのであろう。



(渡良瀬川・開始)

通洞駅には、いくつかの資料館と、かつての銅採掘に使われたトロッコ電車の跡が残っており、坑道の数百メートル奥にまで運んでくれる観光用のトロッコ列車が現在でも運営されている。掘られた坑道をすべて足し合わせると、1200Kmにも及ぶようである。地下に張り巡らされた蜘蛛の巣状の坑道である。坑道のなかには、現在でも湿度 100%の状態であり、地形の尖ったところの先端からは、ぼたぼたとしずくが落ちている。

銅は比較的水によく溶ける。硫黄と化合すると硫酸銅となって落ちてくる。濃度の高い硫酸銅溶液を集めて、鉄分と反応させると、溶液は硫化鉄となり、銅が副産物として析出してくる。これを「沈殿銅」という。観光用の通路となった坑道のなかにも、何箇所か「沈殿銅」のピーカが置かれていた。当然のことだが、ピーカの下には、「この水を飲んだり、触ったりしないで下さい」と注意書きしてある。

銅山が閉じられて、足尾町はほとんど寂れてしまった。観光として活用するためには、平らな地面が乏しく、農耕にも向かず、観光地にするには、ポイントが足りていない。かりに潤沢な水があり、温泉でも湧けば観光地になるが、雨が降れば怒涛のように流れてしまう地形である。日光のように巨大な池があればとも思えるが、そのための広さがない。鉱毒が一挙に下流まで流れ出てしまう地形である。

しかも鉱山開発に必要とされる精錬の途中で噴煙に交じって重金属が大気中に舞い上がり、雨とともに地上に落ちて、周囲の山々の樹木を枯れさせている。硫酸酸性の雨が降ったのである。この痕跡はいまでも残っている。山肌がまばらであり、地肌が荒れている。草も生えない。杜甫に「国破れて、山河あり」という有名な詩があるが、足尾では「山河は滅びても、国は生き残らざるをえない」という印象をあたえる。ただし急速な経済成長を行う国や地域は、これがやむおえない鉄則となる。さらに強い表現にすれば、「山河も人も命も滅びても、国は生き残らざるをえない」となる。それは近代国家の鉄則でもある。



島根県の石見銀山とは異なり、世界遺産に登録されて観光地として賑わうような選択肢を含む広さがない。石見銀山は、隣接する位置に、「地底林」展示場があり、三瓶山があり、その裏に奥出雲がある。観光にはコースの組み合わせがいくつも可能という選択肢の広さがなければならない。そうでなければリピーターは呼べない。足尾はひととき銅山として栄え、やがて銅の産出量も減り、寂れた通過駅のような町である。これは「歴史の通過駅」と呼ぶべきものである。少規模であれば、こうした歴史の遺産は日本にはいくつもある。だが足尾では歴史的痕跡が大きすぎる。現在の町民にとって、歴史の汚点を何重にも無理やり外から着せかけられているようなものである。騒ぎを大きくし、足尾を「歴史の悲劇」へと作り替えてきた前史がある。そのため町民のなかには、国会議員として足尾銅山を告発した田中正造への恨みを漏らしてしまうひともある。

資料館では、足尾銅山を訪れた田中正造の写真を見せながら、学芸員が「やくざ」のようでしょうと呟いていた。現在の町民たちは、過度に汚染された足尾というイメージを創り出してきた言説の歴史的ネットワークを引き受け、引きずらざるをえないのである。歴史の地層に埋もれた思いはいつも複雑である。この事情は、東日本大震災で原発事故に巻き込まれた福島の海岸沿いの町村にもやがて降りかかってくる。いまだ時間的な隔たりはないものの、やがて「福島」は、そうした歴史の痕跡を帯びてしまう。歴史はいつも不透明な思いの体積として残り続けてしまう。

通洞駅の高台にこの「資料館」がある。当時の居住地や銅山の写真が豊富に残っている。地元の有志が、NPOを立ち上げて、資料の保存に動き、集められるだけのものを集めたのである。しかしNPOでは財政力もなく、活動の幅は限られている。そこにかつて銅山開発を行っていた古河鋳業が財政支援に乗り出し、「古河足尾歴史館」となった。現在は、潤沢な予算で運営されている。その館長を務めている長井一雄さんに、車に乗せてもらって、各地を案内してもらい、いろいろ話を聞くことができた。

山口青邨という俳人がいる。東大工学部の鋳物学科を出た生粋の科学者であるが、2年間だけ足尾銅山で働き、やがて東大の助教授となり大学に戻っている。そして研究の傍ら俳句を作り続け、『夏草』を主幹した。人知を超えた自然とも人間ともつかぬ局面を取り出すような俳句を作っている。「合歓(ムネ)咲きて駅長室によき陰を」、「おろかなる犬吠えてをり除夜の鐘」等の俳句がある。除夜の鐘に向かって吠える犬という現実の切り取りが、どうにも含み笑いをしてしまうような奥行きがある。人間の営みの一歩先にある「現実性」である。「山河古り竹夫人また色香なき」という俳句は、もう分からない。竹夫人というのが現代の現実性のなかにはもはや存在しない。竹で作ったコモや御簾のようなものなのだろうか。イメージで思い描くことはできるが、明確な輪郭をもつことはない。それでもそうした竹夫人を使っていた生活があり、それがこの句の季語になっている。そしてこうした半ば人知を超えた感性が、渡良瀬では有効に働く面があると感じられるのである。実際に、通洞の駅舎の前には山口青邨の小さな記念碑があり、そこにはいくつかの俳句が刻まれている。

2 遊水地

渡良瀬川の下流は、利根川に注ぐ。渡良瀬川そのものは、利根川への合流点で消滅する。激流を流れてきたいくつかの河川が渡良瀬川とともに、利根川に進み、利根川は何度も河川決壊、氾濫に襲われてきた。そうしたことの対策の一つが、「渡良瀬遊水地」である。渡良瀬遊水地は、ともかく巨大である。藤岡市に位置し、渡良瀬川、思川、巴波川の3本の河川が流れ込んでいる。東側の先端は、すでに小山市に隣接する。周囲全体で27kmほどある。

私の居住地である坂戸から出発すると、圏央道・鶴ヶ島から入り、途中東北道に移り、二つ目の藤岡ICで高速を下り、国道を右折するとやがて遊水地堤防にぶつかる。その手前で、東洋大学板倉校舎へと向かう道路があり、遊水地は板倉キャンパスの裏に相当する。大型車では遊水地湖畔には侵入できないが、狭いポールの間を擦り抜けると、広い駐車場がある。いたるところに「ゴミの投棄は、犯罪です」という看板がある。おそらくかつては、よほど大量のゴミが捨てられていたに違いない。その対策の一つが、大型車の進入禁止であり、湖畔の管理道路を管理車が恒常的にパトロールすることである。

巨大な湿地帯の北の大部分は、植物の宝庫であり、約1000種類の植物が確認され、そのうちの60種程度は絶命危惧種に指定されている。ヨシ原は広大で、平成24年にはラムサール条約登録が行われて、釧路湿原の並ぶ世界有数の湿地帯である。中央の谷中湖を囲むように、北側が第一調整池であり、少し高台の部分に渡良瀬カントリークラブ、つまりゴルフ場がある。東側が第2調整池であり、そこはすでに小山市である。谷中湖はコンクリートでできた人造湖である。

遊水地に車を乗りつけるには、中央エントランスか北エントランスを使う。入り口の取り付け道路でみると、二つのエントランスの間は、数km離れている。中央エントランスは、矢中湖の中央にかかる橋の前で駐車できる。両脇の谷中湖を眺めながら橋の中央まで歩くと、そこが「中の島」だが、そこからさらに対岸に着くには途方もない距離があり、ひるむほどである。



(中央エントランスから中の島を見込む)

北エントランスから北水門を進むと、子供広場ゾーンに出て、ここでキャンプや花火大会が行われる。「体験活動センターわたらせ」の活動拠点となっており、レンタル自転車が用意されている。そこから数百メートル歩くと、茂みのなかの高い草に隠れてほとんど見えないほど小さな看板があり、そこが「谷中村史跡保存ゾーン」である。10体ほどのお墓と神社の跡が残っている。遊水地を作るさいに強制的に移転させられた集落である。住居は強制移転させられたが、墓地までは移転されておらず、周囲には神社跡、お寺跡も残っている。レクリエーション用に作られた湖水脇の広場と、夏草に埋もれてほとんど誰も近づかない「谷中村史跡保存ゾーン」の落差が大きすぎて、巨大な時間の壁が感じられる。墓地の周辺を歩き、草道を抜けると、一挙にレクリエーション広場に出る。まるで異界からこぼれ出た風情である。



(旧谷中村墓地)

谷中湖脇に沿って続く池内水路は、ほとんど水が流れておらず、水草が一面を覆っているような風情である。週日の朝なのに、老人の釣り客が数名いた。老人の釣り客を見かけるといったい何が釣れるのだろうかと思うが、特定の何かを釣ろうとしているのではないのだろう。魚が食いついてくれるまでの時間に、いったい老人たちは何をしているのだろうかとも思うが、こんな思いが湧くようでは、私は釣りには向いていないのだろうとも思う。



(遊水地東岸、魚釣りの場所)

3 歴史の蓄積

渡良瀬川には、歴史の多くの教訓が含まれており、現在の制御された環境のもとに隠されたままになっている。この教訓には、夥しい無名の人たちとともに、2名のビッグスターがいる。それが田中正造と荒畑寒村である。

足尾銅山の開発が歴史に残る形になったのは、江戸の初期である。足尾の農民2名が、渋川を遡り、黒岩山に登って銅鉱の露頭を発見し、それをその地の領主に報告した。1610年のことである。その後ほどなく足尾銅山は、幕府の直轄となる。当然のことながら、この地の農民はずっと以前からこのあたりの銅の散在に気づき、知っていたと思われる。山肌が赤っぽい色をしていれば、銅か鉄がある。少し気を付けていれば、誰にでもわかる。そのことの断片的な記録もある。しかし歴史は、幕府直轄に相応しいように組み立てられねばならない。それが銅山を幕府が管轄し、所有することの歴史の意味である。

銅山奉行の陣屋は、現在の町役場付近に置かれ、精錬所も設置された。この時期、粗銅を掘り出すと、大阪に置かれていた幕府の精錬所に送られ、そこで精錬されていたが、足尾の場合には、現地で精錬した。同じ採掘法では、やがて生産量が落ちて、行き詰ってしまう。事実1700年頃には、最盛期の1割程度まで落ちている。度重なる洪水もあり、1718年の足尾大火で街並み1000余軒が消失して、足尾銅山は疲弊してしまう。そこで幕府が救済のために行ったのが、寛永通宝一文銭を銅貨として铸造することである。この貨幣の裏には「足」の文字が刻まれている。それでも銅山の衰退は止まらず、1844年にはほぼ休山状態となった。

明治に入って新潟の草倉銅山開発に成功していた古河市兵衛が、足尾銅山の経営に着手し(1877年)、通洞坑の開発を行い、11年かけて本山(有木坑)と通洞坑をつないで、運搬と排水の大動脈ができた。電化や精錬や輸送の近代化を進めて、日本全体の銅の4割を生産するまでになっている。1890年には、間藤に水力発電所を作り、電力が使えるようになると、堅坑巻き上げ機、電気ポンプ、機関車を利用した大量生産ができるようになり、古河鉱業は日本有数の企業になっていった。

鉱山で頻発することだが、当面使わない重金属や硫黄性の化合物は、製錬の過程で水に流し、そのまま河川を流れ下ることはしばしば起きる。たとえばレアアースを中国最大の貿易の切り札に仕立て上げたとき、当該の企業はレアアースを取り出して、鉄分その他は捨てていったために、近くの川が全域ピンク色に染まっている映像を何度か見たことがある。大量生産を行えば、下流に流れる金属濃度は一挙に高くなる。中国の場合、国策としてレアアースを安価に設定し、世界中に売りさばいて競争手を追い落とし、シェアを釣り上げたのである。儲かるとなると新たな業者が参入して、川はさらに赤く染まった。2010年に尖閣諸島をめぐる日中で小さな衝突が起きたとき、中国は一時的に日本に対してのレアアースの輸出を禁止した。日本は、ただちにレアアースを用いない技術開発と他の代替となるレアアースの生産地を探し出した。その合間に中国のレアアース市場は供給過剰となり、買い取り手もなく、多くのレアアース工場が倒産した。

渡良瀬川も1890年代に入ると下流域の魚類が大量に死滅したり、農作物が実らないというような

実害が報告されるようになった。1891年の第二回帝国議会で、鉱毒事件について質問書を提出したのが、田中正造である。1897年にも国会質問を行い、東京で演説を行っている。1897年には、第一次鉱毒調査会が作られ、足尾銅山を営業停止にするかどうかで議論が行われ、先送りとなった。貯水池を作り下流に流れ出ないようにろ過する仕組みも考案され、実行されている。しかし大水がでるたびに、水流は貯水池を超えて、時として貯水池の堤防も決壊した。

1900年2月17日には、田中正造は再度質問書を出し、演説を行っている。このときの演題は、「亡国に至るを知らざれば之即ち亡国の儀に付質問書」であり、資料によれば、この質問の趣旨が要領をえないために、これに対しての答弁はできないとある。署名者は内閣総理大臣山縣有朋である。実際、この演説の4日前には、農民らの陳情団が群馬県の川俣で警察隊と衝突し、流血の惨事となり、逮捕者も出た。そうした事件(川俣事件)の後の国会演説である。

実際に田中正造の行った演説は凄まじいもので、鉱毒事件に対するこれまでの訴えがまったく通じないことに苛立ち、古河鉱業への隣接地・山林の払い下げの不当性、鉱毒に対応しようとした栃木県知事が島根県に左遷されたことを皮切りに、内務省、大蔵省、文部省、陸軍省、農商務省が、いかに怠慢で責任を回避してきたかを暴露、告発する内容である。

演説自体は、義憤に基づく訴えではあるが、国家への思いから、木っ端役人への非難まで、さらには同僚国会議員を無能だとする罵倒に至り、思いの丈を押し流し出すような勢いで語られている。実際に何に焦点が当たっているのかがよくわからない。ともかく思い浮かぶものは何でも取り上げたという内容である。

天下国家を論じるように大きく網をかけながら、小さな内容にこだわり続け、ある意味でスタンドプレーを含んだ演説であり、現代では「暴露型名物議員」に相当する。そしてそれを演出としてやっているのではなく、まさに地でやっているところが田中正造の真骨頂であり、またそれは自由民権運動の高揚し続ける時代の姿でもある。実際、実務的な手順を問いたただすのではなく、行政的な手続きとはすれ違ってしまうような質疑である。それはおよそ以下のような調子である。

・・・十二年に足尾銅山に此の製銅——銅を製す所の機械を据え付けました大機械を据え付けましたのが、十二年に完備したのが、それで十三年から毒が知れたのを栃木県の知事が之を見つけたので、それから其の知事が十三年十四年十五年と此の鉱毒のことをやかましく言うと、此の藤川為親と言う知事は忽ち島根県に放逐されたのが、鉱毒に政府が干渉する手始めである。古いことでございます、決して此の鉱毒事件は今日ひどくなったから言い始めたのではない。此の藤川為親と言う者が先達で始めて放り出されると、其の後の知事は最早鉱毒と言うことは願書に書いてはならない、官吏に口に言ってもならない、鉱毒と言うことは言ってもならないということにしてしまった。それがために民間の無心なる人民は、十年鉱毒を知らずにおったが、二十三年に至って不毛の地が出来たに附いて、非常に驚いて、初めて騒ぎだした。

(田中正造、朝永三十郎『反戦平和文芸集』15頁)

もちろん国会ではほとんど相手にされない。「そこまでにしておけ」というヤジも「そんなことがあったのか」というヤジも残っている。理路不整然という話しぶりである。翌年には田中正造は国会議員を辞職し、国会議事堂の近くで明治天皇に直訴する。死を覚悟してのことであり、即刻拘束されたが、政府は「狂人が馬車の前によろめいただけ」だとして、即日解放している。

法的には環境権のない時代のことであり、民権運動という政治的権利の獲得と、環境維持のための活動が重なっているために、細かな対応方針が設定できない時代のことである。そのため田中正造のように身体を張った活動がどうしても前景化してしまう。田中正造の自伝を読めばわかるが、幼少期から「やんちゃな義憤」にあふれた人物だった。

1902年には、鉱毒の技術的対策よりは、こうした鉱毒が利根川へと流れ出て、首都圏全域を脅かすことへの対応が求められた。環境問題は、自分の身に及ばなければ、容易には「問題」として感知されない。「気づかず過ごす」ということが、「環境という事象」のなかに含まれている。明治29年の大洪水では、鉱毒が利根川さらに江戸川に移り、本所深川にまで及んだ。時の農相榎本武揚は、本所小梅の自分の邸宅にまで鉱毒が流れ込んだことに愕然としたが、被害の範囲が広すぎて、対応できないままであった。

一般には渡良瀬川の水が、利根川に流れ込む手前で、貯水池にため込むことが必要になる。貯水池に鉱毒を沈殿させるのである。当然ながら、貯水予定地では反対運動が起きる。渡良瀬川は、利根川に注ぐ。それは通常の場合である。大雨が降り、利根川の水位が高くなれば、逆流して渡良瀬川を上り、この水は谷中村周辺を洪水で埋め尽くした。渡良瀬川と利根川の両方の氾濫を防ぐもっても有効な選択が、谷中村である。

谷中村は、何度も洪水に見舞われ、堤防のかさ上げ、排水路の設定を行うなど膨大な工事が繰り返されている。1902年には第二次鉱毒調査会が設置され、やがて巨大な水溜めを作るという提言となっていく。この水溜めが「渡良瀬遊水地」であり、洪水の防止と鉱毒の堰き止めが、この遊水地に託されることになった。鉱毒が首都圏に及ぶことを防ぎ、かつ洪水が下流にまで先延ばしになることを防ぐのである。

谷中村の移転計画は、1904年から実行に移される。1903年時の谷中村の人口は、2527人、戸数377戸である。一挙に移転するには、規模が大きすぎる。また移転に応じない人たちもでる。最後は強制収容しかない。それだけの広大な事業である。開始してから15年ほど要している。その後昭和に入って以降も、調整池として何度も手を入れて、今日の「渡良瀬遊水地」が出来上がっている。そして世界有数の湿地帯として、現在の姿になったのである。

ラムサール条約は、湿地保護を目的とした条約である。日本全体では、46か所の地域が登録されている。湿地は、多くの場合、排水施設が整えられ農耕地に変えられていく。水の通りが管理できれば、水田にも転用できる。合理的な生産性をもたせていくのである。ところが湿地そのものは、生態系のなかでは多様性が大きい。水と光を存分に受け取ることができ、特定の用途をもたないのだから、機

能的に見れば単一化しない。ことに水鳥の多様性維持には好条件が備わっている。ラムサール条約の三つの柱は、生活と共にある湿地の保全、再生を基本とすること、そこでの賢明な利用をつうじて、生態系を維持し、そこから得られる恵みを持続的に活用すること、湿地の保全のために人の交流、情報交換、交流、参加、啓蒙活動を行うことである。この条約に認定されたことで、渡良瀬遊水地は、まさに世界有数の湿地帯となった。

(一面のヨシ)



湿地帯をもっとも多く占める植物がヨシであり、一面がヨシに覆われるので、ヨシ原と呼ばれる。大きなもので背丈は4メートルにもなる。この遊水地には、河川や水路が多く、水路に沿ってヤナギ類を主とした樹林も点在している。沼にはスゲ類が多く茂り、ヒシも水面を覆うように広がっている。春にはスイレンを巻き上げたようなトネハナヤスリが一面を占め、夏には赤みがかかった紫のエゾミソハギが背丈を1メートル近くまで伸ばしていく。秋には小さな赤い実が集まって金平糖のようなかたちとなるアキノウナギミツカが、隙間を通る空気の冷たさを感じさせる。そして冬にはヨシが刈り取られ、ヨシズが作られる。

遊水地形成までの歴史そのものは、形成されるに応じて、姿を消していく。現在とはつねに歴史の結果であるが、歴史は現在のなかに姿を消す形でしか見ることはできない。人間の能力は、歴史的変化の結果だけを見ることに適している。歴史はまさに隠され、忘れられることによって、そこに在るのである。

そしてしばしば起きることであるが、歴史はまさに時間の推移とともに別の意義をもって、繰り返し別の姿で現れてくる。渡良瀬遊水地は、鉍毒の下流領域への拡散を防ぎ、鉍毒の濃度を下げていくための文化的な装置であった。しかし集中豪雨の度合いが高まるにつれて、大きな河川の重要な部分には、遊水地を設置することが最善の対策の一つであることも明らかになっている。2019年秋に首都圏直撃のような台風が2つやってきた。多くの河川で堤防が決壊し、長野県の千曲川の堤防も決壊した。そのとき堤防を強靱化し、堤防を高くしてさらに補強するという対策が取られる。

だがおそらく温暖化の効果の一つだが、豪雨の規模と度合いは、しばしば事前の想定を超えるもの

になってきた。そこで大き目の河川には、各所で「遊水地」を設定し、水の勢いの緩和地として活用することもアイディアの一つとなった。従来治水機能を支えたのがダムであり、ダムは放流される水量を調整する機能をもっている。だが2019年の台風では、ダムの決壊まで進む可能性が出て来て、ダムからの放流も検討されるようになった。実際に、人工の排水路である荒川には、荒川河川敷というかたちで多くの「遊水地」候補地が「設計」されている。また地下に遊水地と同機能の巨大な溜池も作られている。ダムよりもむしろ遊水地を設計したほうが良い地域も多い。遊水地は、豪雨治水対策という点で、新たな選択肢として活用できる歴史的局面になったのである。

<参考文献>

- 足尾町郷土誌編集委員会『足尾郷土誌』（ミニコミ誌、1978年）
- 足尾町文化財調査委員会『足尾町閉町記念 足尾博物誌』（足尾町、2006年）
- 荒畑寒村『谷中村存亡史』（神泉社、1970年）
- 小野崎敏『足尾銅山の光と影』（自費出版）
- 加藤清次『知るより考える足尾』（自費出版、2019年）
- 木下尚江編『田中正造の生涯』（宗高書房、1966年）
- 小出五郎『沈黙のジャーナリズムに告ぐ——新・仮説の検証』（水曜社、2010年）
- 立松和平・東京新聞写真部『渡良瀬有情』（東京新聞出版局、1992年）
- 高田秀重『プラスチックの現実と未来へのアイデア』（東京書籍、2019年）
- 田中正造『田中正造昔話』（日本図書センター、1997年）
- 田中正造他『反戦平和文芸集』（日本図書センター、1997年）
- 三浦佐久子『足尾を語る会』（自費出版、2006年）
- 港千尋『風景論』（中央公論新社、2018年）
- 由井正臣、小松裕編『田中正造文集』（一）（岩波文庫、2004年）
- 山口青邨『自選自解 山口青邨句集』（白蔦社、1970年）
- 山口青邨『明治秀句』（春秋社、2001年）
- 渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団『渡良瀬遊水地——生い立ちから現状——』（2012年）
- 渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団『渡良瀬遊水地植物ガイドブック』（2013年）
- 渡良瀬遊水地アクリメーション振興財団『渡良瀬遊水地の植物図鑑』（2014年）